

デレク・プリンス 教への遺産アーカイブ
学びの書簡シリーズ
試練を耐え忍ぶ

試練を耐え忍ぶ

デレク・プリンス

マタイの福音書 24章とマルコの福音書13章で、イエスは再臨する直前の世界の状況を預言的に示しました。今日私たちは、予見されたそれらの状態の多くを目の当たりにしています。一方イエスは、そのような状況下を生き抜くための指針をも信者たちに与えました。その鍵となる必須条件は、次の一言に集約できます。耐え忍ぶ、です。

始めに、二箇所の聖句を見ていきます。いずれにおいても、イエスは人間関係の崩壊と広範囲に及ぶクリスチャンへの迫害について語っています。まず、マタイの福音書 24章からです。

不法がはびこるので、多くの人たちの愛は冷たくなります。(12節)

人々が不法状態に陥る時、人々は愛の欠如状態にも陥るのです。愛とはしばしば、自由で制約のない、規律や訓練を要しないものだと考えられがちです。しかし、それは正しくありません。愛と訓練は密接に関係し連動しています。訓練や規律が崩壊するとき、愛も冷えてしまうのです。この12節における「愛」はギリシャ語のアガペー、すなわち本質的にキリスト者の愛であるという点は、非常に重要です。イエスはこの世の一般的な愛ではなく、キリスト者の愛が冷たくなると言っているのです。これは世間の愛が冷える以上にはるかに深刻な事態です。

このキリスト者の愛の欠如状態を予告したのち、イエスは続く13節で次の助言を述べています。

しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます。

救われるためには最後まで試練をくぐり抜けねばならず、私たちには耐え忍ぶことが求められます。マルコの福音書 13章12-13節にもよく似た

予告と助言が見られます。

また兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子は両親に逆らって立ち、彼らを死に至らせませす。

また、わたしの名のために、あなたがたはみな者に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ人は救われます。

ここでもまた、家族間でさえ裏切りや不真実な行為、そして全ての者からキリスト者は憎まれるという、大変暗い光景が示されています。だからこそイエスは、私たちは耐え忍ばなければならぬと言われたのです。

耐え忍びが生み出すもの

聖書には、耐え忍びと私たち全てが必ず直面する試練に関して一般的に述べている箇所がいくつかありますが、その中に、いかに耐え忍ぶべきものであるかという原則を示している箇所があります。ローマ人への手紙 5章から見ていきます。

ですから、信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。

またキリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私

たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。

そればかりではなく、患難さえも喜んでいきます。それは、患難が忍耐を生み出し、忍耐が練られた品性を生み出し、練られた品性が希望を生み出すと知っているからです。（1-4節）

耐え忍ぶことは、試練を経た者としての品性を生み出します。突き詰めていけば、キリスト者としての品性の形成です。患難を喜ぶ（誇りとし、栄誉とし、歓喜する）ことができるのは、患難こそが、また患難によってのみ、人格形成に必須である忍耐が生じるからです。その忍耐により、筋金入りの確かな品性が生み出されるのです。

「私の兄弟たち。さまざまな試練に会うときは、それをこの上ない喜びと思いなさい。」とヤコブの手紙 1章2節は述べています。試練は常に私たちの益のためであるということを念頭に、神が私たちに試練を経るに値するとみなしてくださることに對し、私たちは神をほめたたえる必要があるのです。この矛盾しているように見えることがどのような仕組みで働くのか、ヤコブは次のように説明しています。

信仰がためされると 忍耐が生じるということを、あなたがたは知っているからです。

その忍耐を完全に働かせなさい。そうすれば、あなたがたは、何一つ欠けたところのない、成長を遂げた、完全な者となります。

（ヤコブの手紙 1章3-4節）

試練の中に置かれ、しかし屈さずに耐え忍ぶならば、私たちの品性や人格のあらゆる面が築き上げられる、とヤコブは述べています。試練と耐え忍びが、完成された、余すところなく成熟したキリスト者へと私たちを造り上げるのです。

私たちの品性の成長や向上を促す優れた試験の場の一つに、同じメンバーの小人数のグループで毎週集う、信頼関係に基づいた忠実な交わりがあります。このような親密な状況下でお互いの人生を分かち合っていくと、それぞれの性質や人生の中に扱われていない部分のあることが、きまり悪くも次第に明らかになってゆくものです。そのことを恐れて、もし自分を他の人にさらけ出さなければ、まだ対処されていない人格の領域について自分を偽り、そのような部分をあらわにする試練に直面するたびに避けてしまうことになりま

す。

ある人が、交わりとは「屋根を外し、壁を壊すこと」だと言っていました。屋根があったところで神は全てをお見通しですから、私たちにとって屋根を外すことは特に問題ないでしょう。一方、壁を取り払って仲間に自分というものを見えるようにすること、このテストにはみな、かなりのためらいと抵抗感を覚えるものです。

キリスト者としての私たちの品性に対するテストと鍛錬の場として、このような信者間の親密で誠実な交わりに勝るものはありません。

試練

さて、私たちが経験しなければならない試練とはどのようなものでしょうか。その非常にシンプルな概要がマタイの福音書 第13章に見られます。よく知られている、種蒔きのたとえです。このたとえ話で、イエスはみことばを聞いたさまざまな状態の人を、種の蒔かれたさまざまな地にたとえて話されています。

ある種は道ばたに落ち、地中に入り込むことなく鳥に食べられてしまい、またある種は岩地やいばらの中に落ち、そしてどうなったか、イエスはそれらを述べられたあと、それぞれの状況がどのような人のことを表わしているのかを説明されます。

御国のことばを聞いても悟らないと、悪い者が来て、その人の心に蒔かれたものを奪って行きます。道ばたに蒔かれるとは、このような人のことです。

（マタイの福音書 13章19節）

この種は、鳥が来て食べてしまうまでただずっと地面に落ちたまま、蒔かれた人の人生に入り込むことは全くありませんでした。

イエスは続いて、種を確かに受け取って実をつけ始めたものの、試練を耐え忍ぶことができず、結局のところ実を結ぶには至らなかった二種類の人について説かれます。最初のグループは「岩地」のある人、次のグループは「いばら」のある人です。

また、岩地に蒔かれるとは、みことばを聞くと、すぐに喜んで受け入れる人のことです。

しかし、自分のうちに根がないため、しばらくの間そうするだけで、みことばのために、困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。

また、いばらの中に蒔かれるときは、みことばを聞くが、この世の心づかいと富の感わしとがみことばをふさぐため、実を結ばない人のことです。

(マタイの福音書 13章20-22節)

試練には大きく分けて二つあります。人生がとても苦しい時ととても順調な時です。一つ目は迫害、二つ目は繁栄です。ある人々は苦難の迫害に耐えきれず、ある人々は富や成功のテストを耐え抜くことができません。ある人々は苦難の試練には屈さず乗り越えながらも、美しい住まいや車、その他の裕福さで神に祝福されると、神の御国の事よりもこの世の事にはるかに没頭してしまうのです。

また、みことばを喜んで受け入れ、異言を語り、どこにおいてもあかしし、預言し、神の祝福を浴びているような勢いの人々が、数ヶ月後にはもうその姿がないこともあります。困難に見舞われて、弱りしおれてしまったのです。

実際、私たちはどちらの試練にも最後まで耐え忍ばなければなりません。私たちは苦難によって、また成功によって試されるのです。ではここで、耐え忍びを成し遂げるための四つの聖書的原則を挙げましょう。

1. 確固とした献身。第一の原則は、イエス・キリストに対して、心からの献身をすることです。これは、通常のクリスチャン人生の歩みが始まる方法です。

新しい回心者の人々に向けてなされた励ましと導きが見られる二つの聖句があります。まず、使徒の働き 11章23節には、アンテオケの町の新しい信者のグループにバルナバが何を語ったかが記されています。

彼はそこに到着したとき、神の恵みを見て喜び、みなが心を堅く保って、常に主にとどまっているようにと励ました。

「心を堅く保つ」というキーフレーズが示すのは、いかなる状況であろうとも主に従うという堅い決意です。たとえあなたのご友人がそうしなくても、あなたはそうするのです。ご家族がそうしなくても、あなたはそうするのです。それが私たちに求められている「心を堅く保つ」ことです。

続いて、使徒の働き14章22節では、バルナバとパウロが新しい信者の人々に向けて、同様の勧告と教えを行なった様子が見られます。

弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりとどまるように勧め、「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならない」と言った。

苦難を通らずに神の国に至ることはない、ということを通して新しく信者となった人は知っておく必要があります。「神の国」には二通りの意味があります。一つは、イエスがやがてもたらし建てる、未来における御国です。もう一つは、私たちが今入国し、その中に生きている、現在における御国です。私たちは多くの苦難を経て御国に入るであり、人生のあらゆる領域が重圧にさらされることとなります。

ですから、主のもとに来た人々に対し、神の国の歩みに入るなら、苦難と主への反抗勢力を通ることになる、ということ私たちは警告しなければなりません。イエスさまのもとに来れば全ての問題は解決すると言うのは不当なことです。実際には、それまでの人生ではあることすら知らなかったような問題に遭うからです。主イエス・キリストへの確固とした献身がそれらの試練を耐え忍ぶためには不可欠です。

2. 永遠なるものに目を据える。耐え忍ぶための第二の原則は、ヘブル人への手紙 11章27節に見られます。エジプト王女の子、王位継承者として育てられたモーセに関する記述です。モーセには、最高の教育、富、社会的特権といった、この世が与えるすべてがありました。しかし四十歳の時、それら一切を捨ててエジプトから逃れ、荒野の片隅でわずかな羊を飼いながら、以後四十年間を過ごしたのです。聖書はモーセについて、次のように述べています。

信仰によって、彼は、王の怒りを恐れなくて、エジプトを立ち去りました。目に見えない方を

見るようにして、忍び通したからです。

ここに耐え忍びの本質があります。目には見えない主を見続ける、ということです。

信仰とは目に見えないものを見ることを可能にするものであり、「目に見えないものを確信させるもの」（ヘブル人への手紙 11章1節）です。私たちが耐え忍ぶためには、目には見えない世界のほうが目に見える世界よりも現実的でなければなりません。そうでなければ、この世の体制に心を奪われ、目には見えない神の御国の現実に背を向けてしまうことになるでしょう。

コリント人への手紙 第二 4章17-18節に次のようにあります。

今の時の軽い患難は、私たちのうちに働いて、測り知れない、重い永遠の栄光をもたらすからです。

私たちは、見えるものではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。

私たちが見えないものに目を据え続けている場合にのみ、試練が、私たちに対する神の目的を良い結果に導くということを理解しておくことが重要です。目に見えないものは永遠であり不変です。聖書に向き合う時間を取ってください。聖書を読み、思い巡らし、聖書の中に生き、信じ、みことばがあなたにとって本物となるよう、聖霊に求めてください。そうすればやがて、神のみことばはあなたにとって本物となり、この世のいかなるものも、あなたがイエス・キリストに不忠実となるように惑わすことはできなくなります。

3. あきらめない。主に確固とした献身をすることと、見えないものを見続けることに加えて、たとえ失敗してもあきらめない、という第三の原則があります。悪魔の最も賢いトリックの一つはこうささやくことでしょう。「お前は失敗者だ。あきらめたほうがまだ。神はとっくにお前を見捨てているのだから。」その言葉を信じてはいけません。悪魔は嘘つきです。ダビデは詩篇の37章でこう書いています。

人の歩みは主によって確かにされる。主はその人の道を喜ばれる。

その人は倒れてもまっさかさまに倒されはしない。主がその手をささえおられるからだ。

(23-24節)

もし転んでも、主があなたのその手を握っておられるので、再起不能なることはない、ということ覚えていて下さい。ダビデもそれを知っていました。バテ・シェバに関するとても悲惨な罪を犯しましたが、神は彼を赦し、回復させました。ですから、ダビデはこのように言うことができたのです。「たとえあなたが倒れたとしても、あきらめてはならない。神があなたを必ず起き上がらせて下さる。」

新約聖書の中にも失敗した人がいます。ペテロです。イエスは、ペテロがイエスを三度否定することを知りながら、こう言われました。

シモン、シモン。見なさい。サタンが、あなたがたを麦のようにふるいにかけることを願って聞き届けられました。

しかし、わたしは、あなたの信仰がなくならないように、あなたのために祈りました。だからあなたは、立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」

(ルカの福音書 22章31—32節)

イエスの祈りは、ペテロがイエスを否まないようにではなく、ペテロの信仰がなくならないように、というものでした。「たとえあなたがわたしのことを知らないと否んだとしても、あなたの信仰が失われません。あなたは失敗しますが、再び立ち直ります。」とイエスはペテロに言われました。同様に、もし転んでも、信仰によって主に手を伸ばし、主に立ち上がらせていただきましょう。決してあきらめてはいけません。主はあなたのことをあきらめてはおられません。

4. 栄冠を目指して。第四の原則は、栄冠を受けることを忘れないです。人生におけるあらゆる問題が、今、すべて解決してしまうわけではありません。未来に託されているものもあるのです。

パウロは牢獄の中から、次の信仰の証しを書きました。「私は勇敢に戦い、走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました。」(テモテへの手紙 第二 4章7節) 戦い、走るべき道のり、信仰、これら三つは切り離すことのできないもので

す。信仰を保つには戦わなければなりません。信仰とは戦いです。戦わないで信仰を保つことはできません。走るべき道のりを最後まで走りきるには、戦いを戦い抜かねばならないのです。パウロはこれらの三つをまっとうしました。戦いを戦い抜き、レースを完走し、信仰を守り通したのです。そのすべてを終え、パウロは栄冠を待ち臨んだのです。

「今からは、義の栄冠が私のために用意されているだけです。かの日には、正しい審判者である主が、それを私に授けてくださるのです。私だけでなく、主の現れを慕っている者には、だれにでも授けてくださるのです。」
(テモテへの手紙 第二 4章8節)

パウロは非常に不当な支配者の手による裁判と起こりうる処刑を目前にしていました。しかし、こう言いました。「これは私にとっての最終判決ではありません。真の裁きの日、すなわち栄冠を授かる日が私を待ち受けているのです。そして、その審判者は、絶対的な正しいお方なのです。」

中には誰が金メダルを受けるのかを見て、かなり驚く人もあるでしょう。それは私たちが走ったスピードによるのではなく、主に仕えた誠実さと揺るぎなさによって基づくのです。もし私たちが試練を耐え抜くならば、精錬された金のように、現れ出るでしょう。

出典：雑誌『New Wine』1980年5月号 掲載記事
“ENDURING UNDER TRIALS”

© Derek Prince Ministries Asia-Pacific
聖書 新改訳©1970,1978,2003 新日本聖書刊行会

